

【国際交流基金事業 招聘報告書】

文学部・教授 石川日出志

2016年度国際交流基金事業外国人学識者招聘プログラム（短期）として、中国・南京大学歴史学院考古文物系・文化與自然遺産研究所・助理研究員の費和平氏を、6月28日～8月4日の間、招聘した。本学文学部・大学院文学研究科および日本古代学研究所（代表石川日出志）では、数年来、南京大学歴史学系教授・賀雲翱教授およびその研究者スタッフと相互研究交流を重ねており、その一環として今回、費氏を招聘したものである。

費氏の専門は、中国考古学・文化遺産学であり、多くの考古学的遺跡の発掘調査や、無錫恵山祠堂群文化景観及び江南水郷など世界文化遺産申請のための調査にも従事している。本学の古代学部門が、単に歴史学・考古学・文学・民俗学・民族学的手法による複眼的な研究を進めるとともに、研究資料の生成から保存・活用までを視野に入れた文化資源学的活動を進めていることから、費氏の調査・研究実践の方法から課題までを吸収することを目的に招聘した。

招聘期間中、次のように3回のセミナーを開催した。第1回目の論題は「宗族文化遺産と晩清以降中国社会の再編成」で、学内外研究者と大学院生を対象として研究棟第2会議室で開催した（18:00～20:00）。第2回目の論題は「泰山から東海、あるいは東海から地下へ―北宋中期以前の買地券に常見される用語の検討―」で、学内外研究者と大学院生を対象としてGF4021教室で開催した（18:00～20:00）。第3回目の論題は「漢から唐の都市考古学発見状況」で、大学院生を対象としてGF414B教室で開催した（14:40～16:10）。日本古代史・考古学・アジア史・古代文学を専門とする研究者・大学院生がそれぞれ20～40名参加し、用語・概念整理の問題から日中間の認識の相違まで多岐にわたる議論が交わされた。招聘責任者としてもっとも印象的であったのは、研究対象の時代の広範なことと複眼的研究の実践であり、本学古代学部門の方向性とよく整合する点である。しかし、その一方で、幅広い研究対象どうしをどのように接続して今後の拡充を図るかの難しさも痛感した。

なお、費氏招聘期間中、南京大学大学院生およびPD4名が私費で本学を訪問し（文学部・文学研究科で受け入れ）、7月8日に本学の文研GP＜複眼的日本古代学研究の人材育成プログラム＞所属院生と研究交流会を開催した。その開催記録は同プログラムHP（http://www.meiji.ac.jp/dai_in/arts-letters/jkodaken/news/2016/6t5h7p00000m8hnc-att/6t5h7p00000m8hp6.pdf）を参照されたい。中国では、博士後期課程在学中に1年間他国への留学を支援する取り組みが実施されているが、そうした制度以前に大学院生の行動力と研究力の高さを痛感させられる出来事であった。

今回のような招聘研究交流は、継続して初めて教育・研究に生きていくものであり、今後とも積極的に推進していく所存である。